

武蔵野市市民活動推進委員会

第5回委員会 議事要旨

日時：平成28年9月27日（火）午後2時から午後4時

場所：武蔵野プレイスフォーラムB

1 開会

- －事務局より手持ち資料確認
- －委員長より今回の委員会の内容説明

2 議事

（1）担い手不足解消のための取り組み、コーディネーターの具体化

- ・コーディネーターを具体化する
- －事務局より参考資料②を基に説明を行う。

（質疑・意見交換）

■委員長

- ・本日の議論の1番目は、コーディネーターを定義し、市民活動の推進のために人材をどういう形で確保・育成したらよいかという点について話をしていただく。

■副委員長

- ・日本ボランティアコーディネーター協会が行っている、ボランティアコーディネーション力検定のような資格を取得すると、就職にも結びついたりするので、そういった受験の支援を行い、資格取得につなげると、その先にもつながると思う。

■委員長

- ・民間団体や自治体で行っている講座などの情報を一括して集めて市民に提供したり、紹介あっせんするという必要かもしれない。

■委員

- ・コーディネーターは資質が必要である。いろいろな講座を受けて技術的なものは磨くことはできるが、もともと持ったセンスがある。話をまとめるときに、上手にうまくまとめ上げられるといったセンスが必要である。
- ・それから、コミュニケーション能力も必要である。コーディネーターが一生懸命自分でしゃべってしまって、相手の意見を聞かないで取りまとめて、自分の意見が主になってしまうといったことになるといけない。そのような持っている資質が大事ではないかと思う。

■委員長

- ・そのような資質を持っている方を見つけることが大事である、また、そういう方が参加しやすい環境をつくるということか。

■委員

- ・そうするとよりよい人材が集まると思う。

■委員長

- ・コミセンなどはどうか。

■委員

- ・調整役という意味では、コーディネーターは必要不可欠だと思う。ただ、講座などはあるが、講座を受けて、実際に実践する場がなかなかないというのが現状ではないかと思う。

■委員長

- ・トレーニングを受けてそれを実践する場が必要だということだと思う。

■委員

- ・コーディネーターといっても、何のコーディネーターかということによって違うと思う。公募のような形で、その基準に合う人や、やりたい人が、手を挙げられるシステムを公

に見える化していく。例えば市報など載せたりして、人を集め、養成講座のような学びの場をつくるといったことが必要だと思う。

■委員長

- ・関心があったり、資質がある人が集まりやすいように見える化した場があって、集まった人たちが、今度は学びの場でトレーニングを受けるということか。

■副委員長

- ・段階があることは大事である。また、要所要所にコーディネーターがいるということが大事で、さらにその人の配置をその人のレベルなどに合わせて行えることが大事である。

■委員長

- ・コーディネーターのコーディネーターが必要である。地域ごとにコーディネーターがいて、それを市レベルでコーディネートするような人が必要である。

■委員

- ・会議などで集まったときに、コーディネーターの講座などを経験した人が自然に話し出して議論になっているので、そういった人がコーディネーターなのかなとは思いますが、そういったことを意識して活動してきたことがなかった。

■委員長

- ・市民社協で行っている地域福祉ファシリテーター養成講座などはどうか。

■委員

- ・すでに活動していらっしゃる団体のトップのような方たちが声をかけられて来ていたというような形だったので、その後、養成講座を出た後に一緒に集まって何かをしていくということがなかった。
- ・今までのやり方でコーディネーターというと、すでにいろいろと活動されている方で、お名前が挙がっている方をどう配置するのかといった形だと思うが、広く見える化し、自薦、他薦を問わず応募してきた中から、学びの機会を提供し、適性を見て、人員配置

をするという新しいシステムが必要だと思う。

■委員長

- ・市やボランティアセンター武蔵野や大きな市民活動団体などが、コーディネーターが必要だというときに呼びかけるという形か。

■委員

- ・新しい意見を吸い上げたり、形のないものを一から作っていきこうというわけなので、自主的に自分が開発していけるような発想を持っていないと、新たなものをコーディネートしていくことは難しいと思う。やはり、自薦や他薦であっても、自分が何かをやりたいという思いのある方を募ったほうが、より良いものができると思う。

■委員長

- ・プレイスでは団体に対し経営的な講座などをやっているが、コーディネーターの養成といった面で何かあるか。

■委員

- ・会計の実務やファシリテーション技術を磨く講座などはやっているが、コーディネーターという概念が非常に幅広く、どこにスポットを当ててその講座をやっていけばいいかということが、まだつかみ切れていない。この委員会でそういったことが具体化されると明確になってくるのではないかと思っている。

■委員長

- ・活動している人がほかの活動にも関係していて、つながっている。それが縦横無尽に関係しているということがすごく大事だ。1つの目的に向かって結集する団体にはコーディネートできる人がいる。その人がまた他につながれば、市民活動が豊かにいろいろな可能性を持ってくるというイメージである。
- ・養成というときに、コーディネーターとして頑張っている人は忙しいので、養成講座やトレーニング講座といっても、今さらという感じもあると思う。
- ・ボランティアセンターなどはどうか。

■委員

- ・ボランティアセンターでは昔から、ボランティアコーディネーターという言葉が使われていて、調整役として、ボランティアの募集している方と、ボランティアをやりたい方の間に入って条件を詰めながらバランスよく調整して、話を取りまとめていくという役割をしていた。
- ・調整能力が蓄積されて、長年の間にコーディネーターになる。ボランティアコーディネーターや地域コーディネーターといったときに、地域をよく知って、いろいろなことを複合的につなげられるという能力が必要だと思う。

■委員長

- ・コーディネーターとは一体何か、どういった能力が必要かを少し整理してみると、コミュニケーション能力、創造性や新しいものをつくろうとする意識、調整する力、地元をよく知っているなど、いろいろ出てきたが、他に何かあるか。

■副委員長

- ・リスクマネジメント。成蹊大学はボランティアコーディネーターという名前で人を雇っている。一番大事なことは、学生が危ないボランティアに行かないように配慮する、それは危険の判断。

■委員長

- ・特にボランティアは何でもありみたいなどころもあるので、ある程度歯どめが必要である。
- ・ほかに何かあるか。

■委員

- ・コミュニティの関係では、今年度からコミュニティ未来塾という新しい事業をコミュニティ協議会と協働で始め、現在企画委員会をつくり、話を進めている。コミュニケーション能力やファシリテーション能力を地域の方につけてもらい、どういった形で他の団体とつながっていくかということについては課題であると感じている。
- ・今までもコーディネーターに関してはさまざまな分野で、やっている。教育の分野に関

してはコミセン関係の方にも中に入ってもらい、地域コーディネーターとして加わっていただいている。ほかの分野でかかわっている方が他の分野にかかわっていくようなつながり方をしていかないと、どうしても一つの分野ごとのコーディネーターになってしまう。

- ・市民活動全般で考えるのと、各分野をうまくつないでいくことが大切であると思う。たとえば、生涯学習は、分野においてわりといろいろな分野と関わりを持てる面があるのではないか。そうした関係性を生かしていくというのは一つの手法だと思う。

■委員

- ・ふだんの活動の中から、そういった役割をしている人は出てきているのでは、ということから、コミュニティセンターが地域のコーディネーター役を担うべきだと思っている。やはり、地域を知っている、人も知っているということから、環境、福祉及び健康等、様々な分野のイベントなども行っているので、コミュニティセンターが中心となって人をつなげていくことが、一つの形になると地域がよくなっていくと思う。

■委員長

- ・今までの議論で様々な話がでたので、少し整理をすると、1点目は、コーディネーターの能力について。コミュニケーション能力や開発志向、調整能力、地元をよく知っている、リスクマネジメントができるといった多様な能力が基本となること。
- ・2点目は、そういった力は、トレーニングして向上するところもあるが、もともとセンスとして持っている場合もあること。
- ・3点目は、コーディネーターと言われる人たちは、それぞれ分野ごとであったり、レベルごとであったりするので、そこをつないでいくということが大事であること。
- ・4点目は、自薦、他薦問わず集まってきた人に学びの場を提供する。集めるということと、その人たちが学べる場を提供するという2段階が必要であること。
- ・5点目は、分野別にあるものをつなげていく、例えばそれは、地域によっては青少協であったり、またコミュニティ協議会にそういう役割が求められること。

■副委員長

- ・成蹊大学には、ボランティアのスペースがあって、コーディネーターのところに学生が

自由に相談に来たり、そこで学生同士がつながったりできる。また、フェイスブックなどで友達になると、様々な情報が拡散して、一つの実行委員会などからうまく派生するようになっている。そういった、たまり場のような、そこに行けばみんながつながれるというような場があるが、プレイスなどはどうか。

■委員

- ・それが理想だと思う。プレイスの3階のフロアはそういう機能を持つべきだし、そういうフロアを目指している。定期的に団体の交流会を設けて、各団体の方が、自分の団体のPRができるとともに、他団体とのコラボレーションができるような交流会を実施している。

■委員長

- ・サロンのようになっていて、出会いの場でフリーに交われるというような感じだと思う。

■副委員長

- ・人としてのコーディネーターも大事だが、場としてそれがあることで勝手に人がつながっていくという面もあると思う。

■委員長

- ・成蹊大学の場合は、そういったスペースにコーディネーターのような人がいるのか。

■副委員長

- ・コーディネーターが常にいて、そこで相談を受けている。また、会議室の貸し出しも行う。大きな大学の中での一つのスペースなので、そういう場所に集まり、幾つかの団体が顔見知りになる。イベントの実行委員会などをつくり、実行委員会のメーリングリストで、人を集めるとみんなが協力し合うという形で、誰がというのではなくその場にいた学生、場を共有した学生たちがつながっていく。

■委員長

- ・人とそういった物理的な空間が合わさった一つの間みたいなものだと思う。かつて市役

所の7階の市民協働サロンでは、中間支援組織のNPOに管理委託されていた。そこに、コーディネーターがいて、市民がふらっと行くと、出会いの場になって、情報もあって、サロンみたいになっていた。

- ・プレイスは、ワーキングデスクで目的を持った人が打ち合わせをしているという感じがあり、スタッフの方はカウンターの奥にいて、やはり市民と対職員のような感じがあると思う。
- ・場としてまとまりある場で、スタッフの方と来る人が壁のない感じの設定ができると大分違ってくると思う。

■委員

- ・プレイスの市民活動フロアでは、ふらっと来た方から、例えば、福祉のボランティアをしたいという話をもらおうと福祉の団体の登録の情報を紹介している。ただし、施設の貸し出しを行っている部分もあり、市民活動が目的で来ている人ではなく、自分たちの打ち合わせだけといった目的の方とのすみ分けが難しい。一緒のフロアを使っているので、やはり施設の運営側と利用者様という線引きが、できてしまっていることはあると思う。

■委員

- ・これからコミセンでやりたいと思っていることがある。以前、大野田の地域社協が立ち上がったときに、運営委員全員で人財バンクをつくらうということで、趣味や資格、できることを全部書いてもらったことがあった。ただ、個人情報の問題などもあり、利用できず、もったいなかったと思っている。そういったことをコミセンの運営委員に書いてもらっておくと、何かのときに役立つだろうし、そういったことからつなげていければいいのかなと思っている。

(2) 行政に期待されていること、すべきこと

- ・行政が果たすべき役割

—事務局より資料1、資料2を基に説明を行う。

(質疑・意見交換)

■委員長

- ・参考までに、現行の市民活動促進基本計画では、市民活動の促進を通じて実現する社会像として、最初の部分で、「市民による公益的活動が活性化し、」と書いてあり、行政との協働云々以前に、市民活動自体がとにかく活性化するというのが大事だと書いてある。続いて、「同時に市民活動団体相互や行政等の他の組織との間における「連携と協働が」実現し、」と記載されており、多様な、行政、市民活動団体や企業やいろいろなを含む利害関係者などが連携と協働していくというイメージで作られている。議論の中では、行政との協働ありきではなく、まず市民活動自体が公益的な活動をする環境を整えるのが大事だという点が1つと、協働体制を整えるという点が1つの2段階が必要ではないかということが根本になっていた。
- ・現行の計画の考え方からいくと、行政が果たすべき役割は、1つは、市民活動をサポートして、活性化するように支援すること。もう1つは、協働体制を組みながら市民とともに課題を解決していくという、この2点になると思う。
- ・今この議論では自由に、行政側が果たすべき役割ということで議論いただきたい。

■副委員長

- ・以前に市で、ルーマニアのブラショフの交響楽団の公演をしたときにボランティアを市民から募った。そのボランティアで集まった方たちが残ってブラショフ市民の会の活動に参加している。それが20年も続いて、熱い気持ちのままている。
- ・ボランティアで支えてくれないかと集めたことが始まりになっている。協働というときに一緒にやろうというだけでなく、育てることを含めて巻き込む。適切な支援が継続的に行われることによって、ブラショフ市民の会は育っていると思う。
- ・上手につかまえ、支援を続けることにより人は増えるのではないかと思う。

■委員

- ・一昨日、三鷹市の国際交流協会のフェスティバルに行ってきたが、年々規模が大きくなっている。一つの国際交流協会がやり始めた外国人の人たちとの交流の場ということで始まったものであったが、それが、地域を巻き込んで、市を巻き込んで、いろいろな企業を巻き込んで、それから学生のボランティアや市以外の人も巻き込んで、外国の方と

日本人をつなぐ大きなフェスティバルに膨れ上がっていて、びっくりした。

- ・武蔵野市は、一つのグループが何かを立ち上げるとそのグループ内で何かやるという形で、他のグループを巻き込むということが少ないと思う。そこにコーディネーターの力が出てくるのかもしれないが、そういった巻き込み方をすると、イベントとして大きくなったり、次の担い手がでてきたりして、広がりを持てるのではないかと思う。

■委員長

- ・行政として、コーディネーター能力を発揮しながら、次々と巻き込んで膨れ上がっていく意識・機能が必要ではないか。
- ・基本的なところでいくと、ボランティアの養成や活用や発見に対して行政ができることは何かあるか。

■委員

- ・現計画の中でも市民活動のステージがそれぞれ定められていて、その中の、想い醸成から活動萌芽を増やして展開をしていくという形であるが、そういったタイミングをどういう形で支援していくかということは、なかなか実現できなかった部分の一つであると思う。そのステージに応じてうまく展開していくことによって、団体間の連携が広がっていくということが実現していくと思う。
- ・一つの団体の活動の中だけでやってしまうと、行政側で、例えば、補助金による支援は、通常補助金は事業支援に対して行うものが多いと思うが、どうしても団体支援的な側面になってしまい、長期的にみると支援が継続しづらくなってしまふ。うまく団体が発展していくことによって、適切な支援がしやすくなって来るだろう。

■委員長

- ・以前、議論の中で出た、活動団体の状況に応じたピンポイントの学びの場とつながりがあると思う。

■委員

- ・コミセンでの話になってしまうが、コミセンでは、実際に何かあるたびになかなか行政が口出しをできないという状況があるが、学びの場ということを考えると、やはり行政

も参加型で、お互いに学びの場で勉強していくことが必要である。どちらかという行政は受け手で、討論の場で市民と行政が討論するという場面がなかなかないので、討論ができるような場が欲しいし、行政には地域をもっと知ってほしい。

■委員

- ・資料4の「これからの地域コミュニティ検討委員会の提言」の中でも、5番目に行政の役割という項目があり、⑤にある学びの場の確保の中で、行政職員も市民とともに学びということが位置づけられており、「コミュニティ未来塾」の構想にも少しつながっている。

■委員長

- ・コミュニティ未来塾は、行政職員も一緒に学ぶ仕組みになっているということか。

■委員

- ・まだ構築中であり、どこまで行政職員を入れるかということはあるが、将来展望としてはそうした形で考えている。

■委員

- ・青少協は、毎年市のバックアップのもとでジャンボリーをやっている。大きな骨組みは市で考えてもらい、細かい内容は各地区独自の形でやっているが、それができる地区とできない地区の差が出てきている。地域でやるということはすごくいいことなのだが、もう少し持ち上げて押し上げていただく必要があると思う。任されるのはありがたいが、大きな責任も持たなければならず、やってくれる人が、後任に続いていかない現状があるので、支援をしてほしい。
- ・支援が必要ないと言っている地区もあるが、必要だと言っている地区もあり、応援に行ける地区の人が、応援に行ってはいるが、それでもなかなか難しいところがある。

■委員長

- ・青少協にしろ、コミセンにしろ、それぞれ地域割りがあり、地区によって差が相当ある。そこをうまくバランスをとる、難しいところには行政がサポートしていくということだ

と思う。

■委員

- ・地区割りについてだが、市民活動をやりたいと思ったときに、現状では、コミセン単位や青少協単位といったブロックごとに分かれている。武蔵野全体で考えて、こういう市民活動をしたいと、相談できるコーディネーターのステーションのようなものがあつたらよいと思う。そこに行けばいろいろな話ができる場があつて、そこから、コミセンや、他の団体に話をつなげるという仕組みがあると、もう少しいろいろなアイデアなどいろいろな場所で展開されると思う。

■委員長

- ・地域割りのエリア型のコミュニティとテーマ型コミュニティとよく言うが、地域のことを考えることもコミセンのエリア単位でなく、広域な自由な場があつて、いろいろつながつて展開できるといいという感じか。

■委員

- ・前回の委員会でも、武蔵野市で何かをしようとしたときに場がないという話があつたが、市民が何かやろうと思ったときに場がないと思うのではなく、こういった場もあると新しく提案してもらえるような機能があつたら、もっといろいろなものが発展するようになると思う。

■委員長

- ・開かれたプラットフォームといった感じで、大事なことだと思う。

■副委員長

- ・活動自体は地域の活動でなくてもいいと思う。東京都レベルであつたり、地球レベルのものであつても、そういった市民が一人でも増えると、その人たちが地域で何かあつたときにやってみようという気になると思う。

■委員

- ・ステーションのようなところに、新しいアイデアをおさめることができれば、ボランティアももっと広がりを持つと思う。その地域だけと考えると人数的にも制限があって、協力してくれる人というのがなかなか生まれてこないが、武蔵野市全体で考えたら、そのテーマだったら私たちも実はやりたいといった広がりができると思う。

■副委員長

- ・ブラショフ市民の会などは、JICAでルーマニアに行った方たちが来ていて、武蔵野市にみなさん住んでいるわけではないが、同窓会のように集まって、武蔵野市で何かするのだったら全員が協力すると言っている。それを核に日本全国から協力が得られるといった形になっていくのは、すごく大事なことである。

■委員長

- ・例えば、今言っていたステーションのようなところに、ほかの市ともつながるような機能があると、今言っていたようなことも起こってくる。

■委員

- ・以前、むさしのミニタウンを開催した時に、コミセンだけでは小さいということで大野田小学校の先生にかけ合って、校庭からピロティから全てをお借りして一大イベントをやったことがあるので、熱意があれば可能になるということはある。

■委員

- ・「これからの地域コミュニティ検討委員会」の提言として、地域フォーラムという考え方を示しており、テーマごとに広域的なことを話し合う場としている。防災関係などは、小学校エリアになって、コミセンのエリアとはずれてくる部分もあるので、場を設けて話をすることで、コミセンのエリア以外の形での広がりも進められると思っている。

■委員長

- ・協働という面から見て、行政の役割と課題は何かあるか。市民と行政側が一緒にやろうとするときのポイントや行政なりの心構えや課題、市民と行政が自由に討論する、コミ

コミュニケーションをすることなど、大事なことは何か。

■副委員長

- ・先ほど、地域を知ってほしいという話があったが、例えば、市の職員は、地域の行事などに参加する研修のようなものはあるのか。

■委員

- ・研修のシステムとしてはない。

■副委員長

- ・成蹊大学でも、学園祭があったときに、教員でも行く人もいれば行かない人もいるが、そこに行って教室と違う学生の顔を見た教員と見ない教員はやはり違う。それは、今は自由に任されているが、仕事として、何年かに1度は行くぐらいのことはあってもいいと思っている。市でも、そういった場に、自由にボランティアで行くというのではなく、仕事として位置づけていくことが必要。参加している市の職員の姿を見れば、市民の方は、考えてくれていると思うと思う。

■委員

- ・市長も、職員に対し地域のイベントなどに足を運ぶよう、頻繁に話をしている。いろいろなイベントを見に行くと多くの職員に会うので、足を運んでいないということはないが、行く人と行かない人の差は大きいと思う。

■委員長

- ・市の職員の研修として、年間何十時間は地域の活動に出ることで、休日に出たら、平日に少し勤務が軽減されることも必要かもしれない。そういったことによって、市民との距離が縮まって、ある程度感覚的に地域のことをわかるようになると思う。
- ・以前に、コミセンの窓口を行政職員の人を経験するほうがいいということを行ったが、何らかの形で地域住民と接するチャンスを、ある一定時間職員も持つことを研修として取り組んでもよいのではないか。

■委員

- ・少し突飛な意見かもしれないが、市役所フェスタというのをやってみるといったのはどうか。例えば、市の職員が自分たちがどういった活動をしているか、どんな人たちとつながっているかということ、自分たちが日ごろ付き合っている市民の方に手伝ってもらいながらやる。市役所をもっと知ろうとか、職員の人たちの活動を市民にもっと知ってもらおうというテーマのフェスティバルを1日やってみるといったことはどうか。

■委員長

- ・以前、武蔵野市NPO・市民活動ネットワークがあつて、中間支援組織で市民協働サロン管理運営の委託を受けていたときに、市民が市役所を学ぶ事業をやっていた。たしか、市役所内を見学したりするぐらいだったが、今言っていたのは、待ちの姿勢で受け入れるだけではなく、職員そのものが自分たちを知ってもらおうということで前に出ていくといった感じなのでおもしろいと思う。
- ・今のテーマについてもまとめとして、様々なイベントをやったらどんどん巻き込んでいって、その中でボランティアのきっかけをつかんだり、養成することが必要であることや、市民活動のステージに合わせた学びの場が必要であることや、コミセンや青少協、それぞれの立場から行政に対して支援の在り方について話があつた。また、地域のことならコミセン中心というだけではなく、広域的に市民活動、地域活動をやりたい方が集まって、いろいろ連携したり、アドバイスをもらったり、活動のきっかけすることができる広域的なステーションがあり、そういったステーションを通して、ほかの地域とも連携して大きな活動ができるとよいという話もあつた。さらには、職員の方の研修として地域と一緒に過ごしてみることや、市役所フェスタといった形で、市役所職員自体が市民に対してもっと知ってもらおうようなイベントもおもしろいのではないかという話があつた。

(2) 行政に期待されていること、すべきこと

・市民活動促進政策とコミュニティ政策の連携・融合

―事務局より資料3、資料4、資料5を基に説明を行う。

(質疑・意見交換)

■委員長

- ・現計画をつくるときは、計画策定の翌年からコミュニティ政策の見直しというのがあったので、コミュニティについては置いておいて、主にテーマ型の市民活動を念頭に置きながらつくった計画が今の計画である。その後、コミュニティ政策の検討も進んでおり、コミュニティ未来塾や、地域フォーラムも出てきたということで、現行の計画を見直すときに、コミュニティ政策との連携・融合も入れながら考える必要があるのではないかということで、この議論をしていただくことになる。

■委員

- ・地域フォーラムについては、地域の問題や、今地域がどんな現状であるかを、いろいろな団体と、行政も含めて話し合っていくことが、地域がよくなるきっかけとなり、新しいコミュニティという形で生まれてくるということで、いろいろなコミセンで取り組み始めているので、継続していい形になっていけばいいと思う。まだ始めたばかりだが、継続していけば、地域もよくなっていき、もっと人がつながって、元気な地域が生まれてくると思っている。

■委員

- ・コミセンに何かしたいと熱い思いを持っていくと、マニュアルでこれはこうだから、これはだめといった、そういう館としての形がある。
- ・地域フォーラムのようなテーマ型だと集まる人たちも出てくるのが、コミセンで何かやるというと義務で行かなきゃいけないというようになってしまっているのではないかな。

■委員

- ・最初のコミセンが出来てからもう40年以上過ぎているので、かなり組織として熟成化もしているし、どこのコミセンも様々なことをたくさんやっている。それが手いっぱいになっていて、NPOなどと協働しなければいけないことはわかるが、ゆとりがなくなってきたという気がする。運営委員も高齢化しており、自分たちが行っているイベント・事業や活動自体も、少しあっふあっふしているような状況の中で、なかなか若い担い手がない。若いお母さんたちは働きながら、時間の調整をしながらかかわってい

るような状況の中で、なかなか難しくなっているという状況はあるのかなとは思う。

■委員長

- ・コミュニティ協議会の立場から言うと、特に大型館は、館の管理で大変なところがある。たくさんの人に使ってもらうので、安全性を守らなくてはいけないので、ガードが固くなってしまうということもあると思う。施設を管理することとコミュニティづくりと両方なので、大変なところもあると思う。

■委員

- ・コミセンにしても、コミュニティというソフト面に関しては弱い部分があると思う。やはり、コミュニティとは何ぞやみたいなところは取り組みにくい。ハード面の館の管理運営だと意外と決まりきったことをすればいいから楽という部分がある。
- ・皆さんの活動に対しても、コミュニティに対しても、もう少し向上していかなければいけないということで「コミュニティ未来塾」というものをつくろうということにはなっている。コミュニティ構想の中にも、まちづくりといった部分も入っているが、なかなか取り組めておらず、外からのものを受け入れる大きな気持ちや、優しさなどが少し欠けているのではと思っている。
- ・地域ごとに行政側でコミセンの担当をつけて、コミセンの軌道修正となると自主三原則があるので大変な部分もあると思うが、少し行政のほうからアドバイスできる体制があるといいと思う。

■委員

- ・政策的な流れの話になってしまうが、市民活動支援に関しては、担当ができたときは、NPO法などができたということで、NPO支援というところからスタートした。今、徐々にそれが変わってきて、市民活動支援に切りかわり、少しずつコミュニティの政策に近づいている。もう1つ、コミュニティに関しては、コミュニティ協議会エリアのコミセンの運営の支援といった部分が大きかったが、新しいコミュニティ、コミセン単位ではなく、広がりのある地域コミュニティに切りかわってきている流れなので、少しずつそれぞれが近づいてきているのが現況だと思っている。
- ・市民活動促進基本計画についても、次の改定の中で、それぞれ近づいてきた中でどう関

連づけていくかが、視点の一つになってくると感じている。

■副委員長

- ・市の全体を鳥瞰できる人がいて、団体をつなげることができたり、アドバイスができたり、運営についても、例えばコミセンが困っているときに相談に乗ってあげられるコーディネーターのような存在がいたらよいと思う。

■委員長

- ・コミュニティと市民活動をつなぐコーディネーターは必要だと思う。
- ・簡単に議論をまとめると、市民活動から見るとコミセンは少しハードルが高い面もあるということや、コミセンに目を向けたときも、館の運営が大変であったり、コミュニティの活動も成熟してきていてなかなか忙しくゆとりがない面もあるというのが現状である。
- ・政策的には当時のNPO政策とコミセン政策が近づいてきていて、両方が少し歩み寄り始めたということと、両方つなぐにはやはりコーディネーターというものの役割が大きいとの話があった。

(3) 地域の力に関すること

- ・行政の関与が少ない活動への働きかけ・支援

—事務局より参考資料③を基に説明を行う。

(質疑・意見交換)

■副委員長

- ・資料の中で、協働に取り組まない理由というのが、スタッフが不足している、設立したばかりで余裕がないということは、協働するということは持ち出しだという感じで、市と協働すると楽になるという観点がないということだと思う。多くの方は、やらされるという風に見ているということか。

■事務局

- ・単純に団体として協働ができるまでの体制ができ上がっていないというところもある。

■副委員長

- ・もし市がサポートしてくれると考えるならば、体制をつくるためにも市と協働したほうがよいという意識にならないとまずいと思う。

■委員長

- ・細々とした団体などは、なかなかそこまで思いつかない。あと、生涯学習論の世界でもアンケートをやると、あなたはなぜ学習しないのですかという質問に対して、時間が無い、ゆとりがない、これ大体半分は口実である。だから、協働はいいことだというイメージがあるので、なぜやらないのかというときにゆとりがない、スタッフがいないという、答えやすい項目ではあると思う。

■副委員長

- ・市の側が協働というときに、イメージの提供の仕方がよくないということもあると思う。市と協働するということは、皆さん楽になることですよってというふうに思ってもらえるようにならないとまずいと思う。

■委員長

- ・それは、このテーマに対するととても大事な提案だと思う。協働というのは、協働をやるこんなメリットがあるということを市が情報提供するということが大事である。

■委員

- ・自治体によって予算規模などの状況も違ってくるので、持ち出しだというふうに感じられる側面はあるのだろう。

■委員

- ・協働が行政から丸投げで下請けのようになってしまうと、よくないと思う。

■委員

- ・どういうふうに協働していいかわからないというのが大きいのではないか。自分たちの取り組みは自分たちでやってわかるが、市と協働といったときにどういうふうに取り組

むのか、それを考えるのが手間というか、情報が少ない。

■委員

- ・例えば、事業をやるときに優先的に場所をとれたり、組んだときに活動しやすいという条件下になるということは確かだと思う。

■委員

- ・一回やった人ならわかるかもしれないが、やはりやらないところにとってはとてもハードルが高いように思ってしまうのではないか。

■委員長

- ・協働もいろいろある。行政の枠組みというのがあったり、市民活動は自分たちがやりたいことというのがあるので、やはり重なる部分でないと、市民活動側から協働はできないので、折り合いがどうつけられるかというのもあると思う。

■委員

- ・行政がしたいと思ったときに、したいと思っていることにうまく乗ったNPOなどは、すつと行く。

■委員

- ・協働することは、メリットがいっぱいあるのでありがたいが、例えば、頼んだときにどういう方向に行ってほしいから頼んでいるのか、ただ便利だから頼んでいるのか、後々にはこういう方向にしてほしいという何か目指すものがあるのか。そういった話をする機会があったらお互いによいと思う。

■委員

- ・行政が見えているところはかなり狭いところで、直接かかわっているところでないと分からない面もある。また、行政職員はそれぞれの担当する分野をもっているが、例えば、何か協力を得たいときに、担当間で連絡を取り合い、調整できる面もあるが、限界もある。市民活動は、実は行政と関与しないところがいろいろな形で活発に動いているとは

思うが、なかなかそこを包括して押さえていくことは難しい。

■委員

- ・プレイスでは、NPOの法人格を持っている団体以外でも、萌芽期の小さなグループのサポートを心がけているが、やはりそこが重要であると思う。

■副委員長

- ・成蹊大学でも、大学のボランティアセンターとは全く関係なく、個人で老人ホームに通っているといった学生がいて、もちろん大学が全部把握する必要はないのだけれども、そういう学生がいるということを知るといことは、大学の中にどういう力が眠っているかとか、存在しているかということを知ることになると思う。
- ・全国レベルや、国際レベルのNPOと活動されていて、市に全くひっかかってこない人はいると思う。

■委員長

- ・武蔵野市と関係なく、たまたま所在は武蔵野市にあるが全国レベルで活動しているとか、ほかの地域で活動しているという団体も少しかわりを持ってくれると、ウィン・ウィンの関係ができるかもしれないというのはある。その辺の発見についてはある程度考えてもいいのかもしれない。

3 事務連絡

—事務局より事務連絡

4 閉会

以上